

## 子安塔にみるムラの産婆・産科医

藤 由美

子安塔を追って北総中を駆け巡っていると、時折珍しいデザインや謂れのある石塔にめぐりあうことがあります。その中から助産婦さんが奉納した子安塔、ムラの産婆の墓塔、産科医の顕彰碑を紹介します。

### ・助産婦さん奉納のモダンな子安像塔



二〇〇九年十二月、香取市(旧小見川町)竜谷の円珠院を訪ねると、江戸後期の二基と並んで、美しくモダンな子安像塔が建っていた。乳を吸う子供の姿勢などやや稚拙な不自然さがあるが、赤い唇と青く彩色された長い髪が印象的だ。側面の銘文を見ると、記年銘は彫られていないが、「小見川町竜谷 伊藤か祢 助産婦」と刻んであり、地元の助産婦「伊藤か祢」さん

による近年の奉納と推された。

日本の周産期死亡率は出生一千あたり三・三人と世界的にも周産期医療はトップレベルで、母子ともにお産で命を失う危険は過去のものになりつつあるが、地元の助産婦さんは皆、命がけのお産を何度も介助されてきたことだろう。その喜びと悲しみの歴史をかみしめながら、母体の安全と子の健やかな発育を願う深い祈りを込めて奉納されたに違いない。

ちなみにこの竜谷円珠院の助産婦奉納の子安像塔がモデルにしたと思われる大正期の像が香取市小見川の善光寺境内にある。最近の墓地整理によって、せまい覆い屋の後方に詰め込まれて設置しており、よく観察できないのが残念だが、ひときわ美しい子安観音像で、側面には大正十三年(一九二四)八月の建立年銘が刻まれている。

### ・「お産婆さんのお墓」の子安像塔



助産師がかつては助産婦、さらに古くは産婆とよばれ、その経験と高い技術が、神仏の加護以上にムラの女性たちから頼ら

れていた歴史資料を、ある寺院の墓地で見つけた。

昨年一月、飯岡漁港に近い旭市下永井の花蔵院というお寺で、子安塔を探していると、お寺の方が「お産婆さんのお墓」というのを教えて下さった。やわらかい石質の上、強い海風が当たって子安観音像の顔など一部が風化しているが、右側面を見ると、大正七年旧九月二十八日の日付と観音菩薩種子「サ」の梵字、「眞徳産王大（姉）」という戒名らしき銘があった。

これはお産婆さんの遺徳を顕彰、供養する墓塔であるとともに、お産が無事済み、子育ても順調であるように祈る子安塔でもある。現在も櫛が奉納され、ムラの女性たちに信仰されているらしい。村や町の寺子屋師匠の遺徳を偲ぶ筆子塚はよく見るが、お産婆さんに感謝する子安塔との出会いはこの時初めてであった。

なお、「子安婆々 分別過た名なりけり」という句が江戸中期の『俳諧武玉川』五篇に載っている。神仏以上に頼りになるお産婆さんを「子安婆々と呼びたいが、言いすぎかな」という意味の句である。この子安墓塔が供養する産婆の「眞徳産王大姉」さんも、やはり「子安婆々」と呼びたくなるような存在だったのかもしれない。

### ・お産の名医を顕彰する子安観音碑

東庄町夏目の禪定院に、珍しい石碑がある。『東総の石仏』（服部重蔵、昭和六十一年）に写真が載っている子安観音碑で、上部には、蓮の花を持ち雲に乗って来迎する聖観音像が、下半分には、子供を抱いた婦人像が浮彫りされている。

昨年十二月、現地へ行ってみると、残念ながらカビやコケが増殖し不鮮明ではあるが、細密な図柄が丁寧彫られ、右側面

には「嘉永三戊十月吉日」（一八五〇）、「世話人」として「藤蔵」ほか三名の名前が銘記されていた。



東総の石仏』によれば、「東庄町夏目には現在も和田医院があるが、この家は代々医家で、五代位前の医者は産科の名人であった。そのため数多くの女達が救われたという。その徳を称えて助けられた人達が子安観音として祀ったのがこの碑だといわれている」とのこと。

江戸時代の産科医療は、欧米以上に高度で、中期には賀川玄悦が活躍、嘉永二年（一八四九）には水原三折により『醇生庵産育全書』全十二巻を刊行されていることから、千葉県を含め各地にお産の名医がいたとも思われ、産婆の手に負えない難産は、医師に頼ることもあったであろう。その名医の徳をたたえる碑が子安観音碑の姿をとることに、地域の生活実感と民俗信仰の深さが感じとれた。